

---

# 見上げる先にあるものは……

LUTE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見上げる先にあるものは……

### 【Nコード】

N2758C

### 【作者名】

LUTE

### 【あらすじ】

風を感じる少年、ナガセが立つのは、偽りの大地偽りの空永遠な  
ど感じさせない二つを隔絶する世界の端……だが、世界は偽りに気  
付かない。偽りは捻じ曲げられ、真実へと変貌した。偽りの世界で、  
少年は知りえなかったはずの真実を手にするようになる……

## 第1話 .. 晴れって気持ちいいよね

「運命って言葉、信じるか？」

煙草をくわえながら、気だるげに男は言い放った。

本人自身そんなものは全く信じていそうにない。

もう一人の男は、その言葉だけで答えを出すことが出来なかった。すると、煙草の男はまた口を開いた。

「運命ってのはな、ある。ただ、全部決まってる。運命を変えとかそんなこというけど、無駄。そんなもんずっと前から決まってる。世界はなるようにしかならない。だから俺がいくらがんばろうとがんばるまいと、運命は決まってる、だから、俺はがんばらない」そうやって、運命と言い訳をつけて頑張ろうとしないという運命が、すでに確定していたのだろう。

だが、その言葉は、もう一人の男の運命を確定することになった。

木から落ちたりリングは、地面に落下する。

重力に起因するこの出来事は、周囲の環境さえ把握していれば完全に予測が可能となる。

予測に必要な世の理を、すべて人間が理解しているからだ。

極小の時間であればさらに予測は容易、正確となり、確定された事象となる。

予測結果から、更なる延長線上に起こる落下も導くことも出来る。

それはつまり、極小の範囲、物質を構成する原子ですらも、環境、原子の運動、その他全てのデータを取得できれば、予測可能となることを意味する。

外力が及ぼす影響も、外力となる原子自体を予測すれば判断できる。極小の範囲、極小の時間の未来を確定し、その範囲、時間を帰納的に無限へと押し広げていく。

確定された情報は、世界の真理、未来は、制御すらも可能となった。  
そして、世界の未来は確定された――――

「ねえ、運命って言葉、信じる？」

小柄な少年が、屋上で空を見ながら問いかけた。

「信じるも信じないも、それは人生の未来のことを言うんだろう？」  
後ろでイスに腰掛けた青年が答えた。

「ん、それもそっか……」

視線を足元に向け、眉間にしわを寄せ少年はしばらく考え込む。

その間に青年は腰のポケットから取り出した煙草に火をつけ、考えがまとまるのを待つように無言で吸い始めた。

やがて少年が何か思いついたか、表情は笑顔に変わり、勢いよく青年の方へ振り向いた。

「じゃあ、運命って変えられると思う？」

答えを返すよりも先に、まず紫煙が口から吐き出された。

「それは、運命を変えたと思っていても、変わるってことが運命だったかもしれない。変えたのか、変わってないのか、自分じゃ知れない訳だ」

「天邪鬼な答え」

「まあ、つまりは信じていない、となるな」

「ふん」

「聞いておいてそれだけか」

「シロウらしい答えだなって思って。俺は信じるよ、運命。シロウみたいに上手く言葉には出来ないけど、うん、直感で」

青年の方に振り返り、何がそんなにうれしいのかはわからないが、やはり少年は笑いながら答えた。

「上手く言ったつもりはないが。まあ、ナガセらしいな」

サングラスに隠されて目からその表情をうかがうことは出来なかったが、口元はかすかに笑っていた。

運命を信じる少年の名は、ナガセ。一束だけ尻尾のように伸ばされた赤銅色の髪と金色の目を持つこの少年、身長は実年齢の男性平均を大きく下回っている。

気だるそうにいすに腰掛け、煙草をふかしているのがシロウ。瞳の色はサングラスに隠れわからないが、整えられた烏羽色の髪につけられた青髪のエクステが目立った。

二人とも着こなしこそ違えど同じ服を着込んでいる。濃紺の軍用ジヤケット。軍に所属する身のようなだ。

ナガセ達が立つ屋上から周囲を見渡せば、どの建物も同じ高さの屋上が大地と平行に走り、それはさながら第二の大地を形成しているようだった。

ちらほらと背丈の低い建物があるが、四階以上の建物は一つもなかった。それが、よりいっそう屋上に地平のような感覚を与えていた。そのような景観になる理由は、ここでは、四階約十二メートル以上の建物が建造することが出来なためだからだ。

「いい天気だね。眠くなってくるよ」

語尾は大あくびでぼやけた。目じりに溜まった涙を拭いつつ、再び視線を空へと移した。

「晴れに良いも悪いもないと思うぞ？」

つられてシロウも上を向く。サングラス越しに太陽の輪郭がはつきりと見えた。

「そう？　僕はあると思うよ、良い悪い。なんとなく太陽の強さが違うっていうか、風が気持ちいいっていうか」

「そうか」

二人の意見は合わないほうが多いが、なぜか仲だけは良い。二人とも考えの違いなどまるで意識していない。どちらも、そんな考えもあるのか、と柔軟に受け入れているようだ。

「ね、今日の天気知ってる？」

「わからないな、寝ていて放送は聴いていなかった」

「俺も俺も。深夜に警戒態勢が発令されて待機させといて、結局何

にもなかったもんね、どうせなら始まってくれた方がよかったな」  
「何もないほうがいいさ、もっと寝れなかったかもしれないだろ」  
朝八時、区画別の天気の情報が発地域に一斉放送されるが、どうやら二人とも寝ていて聞き過ぎたらしい。他にもさまざまな内容が放送されるため、内容を把握していなければ一日大変な目に遭うこともある。

「ん？　　そういえば思い出したが、今も警戒態勢だな」

「そうだったっけ。俺わかんない」

警戒態勢中であれば、すぐに配置につけるように軍敷地内、小隊毎割り振られた所定の範囲で待機していなければならないが、彼らはその範囲から大きく外れている。見つければ軍規違反で処罰を受けかねない。

気付いてはいるようだが、従うつもりもないらしい。

突如、シロウの懐に収められていた携帯端末が鳴り出す。遅れてナガセのものも鳴り出した。

「うわあ、やばい」

サブディスプレイから通話相手を確認し、焦りの表情を浮かべつつも、ナガセは端末を開こうとはしない。通信したくはない相手のようだ。

「俺もだ」

シロウも確認すると、すぐに開いて通信を開始しようとする。だが、その手を止め、ナガセに問いかけた。

「何をしている？」

いつの間にやら屋上の端までナガセは移動し、ちょうど欄干を跨ぐうとしているところに声が掛かり、そのまま座ってシロウのほうへ振り向いた。

「俺はこんなところで捕まる気はない！　逃げろんだ！」

隣の兵舎へと軽やかに飛び移る。その先はすぐに軍の敷地外になり、防護柵も屋上までは無い。だが、隣接する外界の建物とは幾分距離がある、およそ五メートルといったところか。

「ちょっと待て」

今度は助走をつけようと屈みこみ、いざ疾走というところに声をかけられ、盛大に前につんのめり、ナガセはとっさに前に手を出して態勢を立て直した。崩れた体勢とは思えない鮮やかなハンドスプリングが決まり、見事に着地。

思わずポーズを決め一瞬静止するナガセ。

「危ないじゃなか!?」

振り向いて怒鳴ったところにシロウから何かを放り投げられ、あわててそれをキャッチする。ジュースぐらいは買えそうな小銭だった。

「お小遣い、やるよ」

「おう、ありがとう!」

軽く手を振り、今度こそ疾走を開始する。先ほどのように構えず、そのまま駆け出した。同時にシロウが端末の通話キーを押し、耳に当てた。

「もしもし――」

ナガセが、飛んだ。シロウはそれを目で追う。細い欄干を器用に踏み台にして、軽々と外の建物へと飛び移った。まるで猫のように音もなく着地し、勢いそのまま再び走り出した。高さ十二メートルともなれば落ちればかなりの確率で死に、助かっても重傷は免れない、さらに距離もあるという場所を平気でナガセは飛び移った。恐怖心などまるでないようだ。

次の建物へと飛び移ろうかというところでシロウは視線をはずし、通信へ集中する。

『おい! 今どこだ!』

スピーカーが割れそうなほど大きな女性の怒声が響く。

「B棟、屋上」

至って平然と聞き入れ、冷静に返答する。

『やっぱりか! 今向かっている、動くなよ!』

「了解」

返答した瞬間、屋上に繋がる金属製のドアが蹴破られるようにもの

すごい音を立てて開いた。二人の女性がそこには立っていた。冷めた目つきでそれを見ながら、シロウは耳に当てていた携帯端末を懐へしまう。

「ナガセはどうした！ 一緒じゃないのか？」

大地をふみ割るように歩み、いまだ怒り続けているのは、先ほどの通信の声の主だ。怒るのは当然だろう、なぜなら、彼女がナガセ達の所属する第二歩兵師団第一遊撃小隊をまとめる小隊長だからだ。後方で開け放たれたドアを静かに閉め、暗褐色の長髪を流す後姿は、おそらくシズネ、彼女も小隊のメンバーの一人である。

隊長であるカガミを含めた、戦場で重要な役目を担う、四人編成の小さな小隊が彼らのポジションだ。

「今さっき、逃げてしまった」

「なんだと！？ お前は止めなかったのか」

「いや、止めようとしたんだが、すぐ行ってしまった」

確かにシロウは制止の声を掛けた。もっとも、それは小銭を渡すためだけの短い時間であって、カガミの意には沿わないものだったが、嘘はついていない。

「……アんのバカチビは」

後ろでまとめられた、鮮烈な真紅の髪をかきあげ、怒気をはらんだ臙脂色の目でナガセが逃げたであろう方角をにらむ。シロウの作戦通り、カガミの怒りの矛先は自らを外れ、ナガセに向けられた、被害は最小に抑えることが出来た。

「バカチビもお前も、なにやってるのかわかってるんだろうな？」

軍規違反だぞ？ そろそろ本気で処分を下してやろうか？」

彼らがこうやって逃げるのは、何もこれが初めてではなかった。隊長の身としては統率力に関わる、頭が痛くなるような問題だろう。だが、今となっては第一遊撃小隊、彼らの名物とでも言うもので、他の人間が見かけてもこれに口出しするようなことはなくなっていた。

「無理だと思っんですけど……。私たちだって、シロウ達を呼ぶた



めに待機場所から離れちゃってますから、全員そろって軍規違反のような気が……」

「わかつている。だから困っているんだ」

軽く頭を抱えているが、口元にはあきれ気味の微笑を浮かべ、本当に困っている様子はない。

カガミの後ろから忠告したシズネの言うとおり、軍規違反を犯したのは全員であり、カガミが処罰を下せる権利はなくなる。動かずに呼び戻せばいいのだが、わざとカガミは出向いて呼び戻しに来ていた。そうすればナガセ達の処罰は全員に分散され軽くなる。今となつてはこの問題小隊に軍部もあきれたのか、この程度で処罰は下らなくなった。シズネもそれを承知しているようで、一緒についてきている。怒鳴ってはいるが、部下のためにあえて動く彼女の根は優しいようだ。

「とりあえず、いったん戻るぞ、バカチビの奴は戻ってきたらぶん殴る」

「……あ、そういえば、カガミ、この後の天気はわかるか？」

「いや、覚えてないね、シズネはわかるかい？」

「確か……」

青緑色の瞳で空をいったん見上げ、セルフフレームのメガネを直しつつ、腕時計へと視線を写した。

「後十分もしないうちに三十分間のにわか雨が降ります。雨量は強め……だったと思います。降らないうちに早く中へ戻りましょう」カガミとシロウは顔を見合わせた。

「これはあいつ、ずぶ濡れ決定だな」

シロウが、その場にいた全員の心の内を代弁した。

## 第2話 .. 雨なんか、嫌い

道路に川でも出来そうな、視界が白く霞むほどの豪雨が地面を叩く。実際には、精密に整えられた排水設備により、路面には水溜りさえ出来ることもない。

人々に物悲しさを当たえることもある雨音も、間断なく強烈に鳴り響けば、単なる喧騒にしかない。

シロウは体力を温存するためサングラスの中で目は閉じていたが、喧騒が邪魔をして寝ることはできなかった。

部屋の中であればこそ幾分マシであるが、外では会話さえままたないだろう。

突然、その喧騒がクリアな形でシロウの耳に届いた。

目を開けるまでもなく、理由は予測できた。

待機場所となっているのは二階の一室、小隊の中に豪雨の中窓を開け放つ稀有な人間はいない。

外からの侵入者だ、窓はシズネが気を利かせて鍵はかけられていなかった。

再び音は遠ざかり、窓が閉められたことを告げる。ようやくシロウは目をあけた。

窓の前に立っていたのは、まるで川に飛び込んできたかのように、全身ずぶ濡れの状態で体を震わせているナガセだった。

いつも、ナガセは脱走したとき二階だというのに窓から侵入してくる。どうやらそれは雨の中でも変わらないらしい。

「どこ行ってたんだ！」

まるで捨てられた子犬のように寂しげな目を小隊に向けるナガセにカガミが駆け寄る。

「うう、さぶい……」

すでにシズネが準備していたタオルで、カガミが抱きこむようにして全身を丹念に拭き始める。

「こんな雨の中になやってるんだ！ 心配したんだぞ？」

その言葉に、さっきまでのぶん殴るといつていたほどの怒りは微塵も感じられない。

ナガセのかわいそうな姿にカガミも気を抜かれたのだ。それを見たシロウは、作戦通りだと思わず小さく笑った。

ナガセを本気で怒れる人間など、そうそういないのだ。相手をしているうちに自然と気を抜かれる。愛らしい、とでもいうか、そういうお得な力をナガセは持っている。

「ああ、もう、本当にびしょ濡れだな……どうしてこんなに遅くなっただ？」

「雨が降り始めたから全力で戻ってきたよ、結構遠くまで行っちゃったの！ ……ひどいや、誰か連絡してくれてもいいじゃん……」  
雨のことを誰も教えなかったことにすっかりいじけている。

「……ああ！ すいません、気づきませんでした……」

ナガセの言葉に、ようやく気付いたシズネは、自らの失態にはっとして謝った。

彼女はよく気の利く女性だったが、時々ひよんなドジをかますことがあった。

「べつにシズネが謝ることじゃないさ、もともと全部こいつが悪い、自業自得って奴だな。私もわざと連絡しなかったしね」

「うう……」

助けを求めるようにシロウに視線を向けるナガセだが、お手上げとあったジェスチャーでシロウは返す。

「俺のせいじゃないやい、雨が降る方が悪いんだ！」

「なんだその駄々のこね方は！ 意味がわからんぞ」  
意味の通らない子供のようになわがままにあきれるカガミ。

「雨なんか降っても誰もうれしくないよ。ずっと晴れのままでいいじゃん」

「たしかに雨を降らせないことも出来るけどな、それでも意味はあるんだ、雨だって重要なことさ」

「何の意味があるのさ」

八つ当たり気味にナガセが話しに噛み付く。

ナガセが雨の意味さえ知らなかったことに、再びあきれれるカガミ。

「あのな、いいか？ 雨が降る意味ってのは、空気の洗浄だ。いくら空調設備が整っているように、空気中に小さなゴミは舞い上がり続ける。それを定期的に雨によって洗い流しているんだ。雨が降った後の空気は澄んでいるとは思わないか？」

「ああ！ わかるわかる、確かに澄んでる。そっか、てことは気持ちいい晴れを向かえるためにも雨は重要なんだあ」

雨の存在意義を知ることができてうれしかったのか、いまだ頭を押し付けられるように拭かれながらナガセは笑顔に戻る。自分が何でイライラしていたのか、もう理由を忘れてしまったかのように表情は明るくなった。

「とりあえずシャワーを浴びて来い、許可する。ただし、二十分以内に帰って来い」

そういつてナガセをタオルごとドアの方へ押し出す。まるで子ども扱いだ。

「は〜い」

もうすっかりテンションは元に戻り、駆け足で部屋から出て行った。

### 第3話 .. スクランプル

ナガセがシャワーから戻ってくるのと、出撃命令が発令されたのは、同時。

基地全体が緊張感を帯び、静かな闘争心に包み込まれる。

「場所はどこだ？」

冷静にシズネに問いかけるシロウ。秘めたる闘争心が、彼に威圧感を持たせる。

「H-3からのメインパイプの終端近くです。戦闘エリアがかなりパイプに近いとのこと、至急応援が必要です」

「なら急ぐぞ、準備は出来てるか！ とくにナガセ！」

やはり、彼女らもまた戦場の空気を作り出す人間の一人だった。ただ一人、ナガセという例外を除いて。

「ええ、今から？ 外出たら湯冷めしちゃうよ、動きたくない」

猶予は少ないというのに、ナガセからは緊張感の感じられない。

「バカいつてるんじゃない！ 早く準備をしろ！」

「しょうがないなあ。俺は武器があればそれでいいよ、準備は済んでる」

ピクニックでも行こうというのか、気楽な様子で答えた。

「何か忘れてもしらないぞ。全員出来たか？」

「はい、シズネ、問題ありません」

「シロウ、いつでもいける」

「ナガセは問題ないよ！」

大きく手を上げて答えるナガセ、本当に大はしゃぎだ。一人の命など何の価値もない、戦場へ行くということを、理解しているのかさえ疑問が浮かぶ。

「ストーム、出るぞ！」

『了解』

血と硝煙渦巻く戦場へ向け、彼らは旅立つ。

巨大な弧を描いて左右に伸び、間近に迫れば、自らを矮小な存在と思わせるほど圧倒的な壁が、空を支えてそびえている。

エッジオブザワールド

世界の端、そう呼ばれた、世界と外を隔絶するその壁の前に、第一遊撃小隊の面々は立っていた。

壁には、大きく『H-3』の文字が描かれている。下段には三メートルほどのシャッターが開き、次々と出撃する部隊を乗せた車に飲み込んでいく。その流れに、ナガセ達も続いていく。

二十メートルにわたって壁の中を通り、壁の向こう側にたどり着けば、そこは人が生活することを拒む、薄暗い外の世界だ。

壁を抜けた直後の開けた場所は、町と変わらぬ高さのメインパイプと呼ばれる巨大な道が伸びるが、その左右に広がる、町になるはずだった壁の役目をなすものは、悲惨とも呼べる光景になっている。

多階層的にビルのような物が密着して押し並び、隙間によって形成された複雑に入り組んだ細い通路が、壁の奥に消えていく。

遙か昔に、度重なるように行なわれ、打ち捨てられていった開発の跡だった。

完成することの出来ない未完成の町が、外での生活を容易ではないものになっている。

エッジオブザワールド

何より一番の問題は、世界の端そのものだった。それは人を守るためのものだが、同時に人を逃がすことのない、檻ともなっていた。装備一式が詰め込まれた装甲車で、メインパイプをひた走る。シロウが運転するその車内で、ナガセ達は闘争心を高めさせていく。交わされる言葉はない。張り詰めた車内の空気をわずかに震わせるのは、車の走行音と、副官であり通信兵の役目も担うシズネのインカムから漏れる、さまざまな部隊からの戦況を伝える小さな通信音のみ。

やがて車はゆっくりと速度を落とし、停止する。目的の場所に着く。手早く全員が外へと降り立った。

そこは現在敵対関係にある国、メイラクとを繋ぐはずの、メインパ

イプの終端だった。途切れたパイプが、国交を隔絶し、全貌を知りえない不気味な敵としていた。もしも、メインパイプが開通していれば、戦争などは起こりえなかったかもしれない。

「現在、敵は149-083から118-082にかけて展開、進攻中です、こちらも各中隊に分かれて応戦中とのこと」

簡潔に整理された情報をシズネがカガミに伝える。

「どこか至急応援が必要な場所は？」

「あります、右翼に展開していた中隊が正面と右方からの挟撃を受け後退しているようです。ここから一番離れて展開している部隊です、他の部隊では援軍に時間が掛かりすぎると思われます」

遊撃部隊であるカガミ達のチームは、小隊というにはあまりにもメンバーが少ない。

戦場が狭ければ、部隊も縮小せざるおえない、機動力が必要となれば、なおさらだ。

移動手段が自らの足のみである、この閉鎖的戦場では、最少人数で戦地を駆け巡る遊撃部隊は、最速の機動力を誇った。

「よし、ならばまずは右翼の部隊と合流する」

「了解」

カガミを先頭に、迷宮と化した廃墟の町へ部隊は吸い込まれるように紛れていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2758c/>

---

見上げる先にあるものは……

2010年10月22日00時57分発行